

温故知新

日野歴史探訪

私たちの住む日野町には、52の大字があり、それぞれの地域が豊かな自然と歴史文化で彩られています。温故知新では、町内各大字の歴史と代表的な文化財をシリーズで紹介していきます。

大字小谷

大字小谷は、必佐地区の北よりに位置し、北で石原、東で山本、小御門、南で三十坪、西で増田と接します。平坦な地形で交通の便に恵まれており、西方の緩やかな扇状地に集落が立地しています。

小谷には方形を基本とする地割や平行する字界が多く見られますが、これは土地を方形に区分する条里制の蒲生郡条里の七条六里にあたることとされ、古代から開発が進んでいたことを示しています。

江戸時代中期に編さんされた地誌『蒲生二郡記』によれば、大谷に対して小さい谷ということが地名の由来となったとされています。この大谷が丘陵地を隔てた日野地区の大谷なのか、あるいは北接する大字石原の字大谷なのかは不明で、今後の研究が待たれます。

竹田神社と石燈籠

字「裏山」にある裏山溜の南側には、一間社流造の本殿と入母屋造の拝殿、境内社南宮神社をもつ竹田神社があります。

社伝によると、寛永6（1629）年、東近江市鋳物師の竹田神社より分祀して創建されました。

江戸時代を通して元和6（1620）年より小谷村の領主であった旗本有馬家がたびたび参拝しており、延享5（1748）年に大改修を加えた際の棟



（石燈籠）

札も残ります。

南宮神社は、かつては南宮御前と称し、小谷の中央に位置していましたが、境内へ移転したとされています（『滋賀県神社誌』）。

神社本殿玉垣の外側の右手前には、総高は169・6センチメートルの六角形の石燈籠が建っています。石材は花崗岩で、神社の創建と同じく江戸時代のものと考えられ、昭和37（1962）年10月1日に町指定文化財となりました。

御代参街道に残る石造道標

御代参街道は、中山道小幡（東近江市）と東海道路土山（甲賀市）を結び、行程約36キロメートルに及ぶ道のことです。

その歴史は中世まで遡ることができませんが、室町時代には「市道」、江戸時代には主に「北国道」「脇往還安土越」

「伊勢道」などと呼ばれていました。「御代参街道」という名は、明治時代以降に一般化したものです。

石原宿より小谷を縦断するこの街道は、字「龍」内に至ると複雑に屈曲しており、集落に入る丁字路には方柱型の石造道標をみることができま

す。

右 ステーション道
左 ひの道

と二面に刻まれています。

ステーションとは、近江鉄道の日野駅を示しており、駅ができた明治33（1900）年以降に建立されたものとわかります。

カタカナの行き先表記のある道標は、滋賀県下に数基しかみられない大変貴重なものです。



（ステーション道標）

◆問い合わせ先

近江日野商人ふるさと館「旧山中正吉邸」

☎0748-52-0008